

日本語学

田島 優

2012年10月に三宅和子他編『「配慮」はどのように示されるか』（ひつじ書房）が刊行された。ここ数年「配慮表現」に関する書籍の刊行が続いている。三宅和子『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』（2011年1月 ひつじ書房）、山岡政紀他編『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』（2012年2月 明治書院）。

「配慮表現」という用語はブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論を紹介した生田少子「ポライトネスの理論」（『言語』26巻6号 1997年）で使用された。そして2001年12月に答申された「現代社会における敬意表現」において、敬意表現の定義として「相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣い」と示されたことで、にわかに「配慮表現」という概念に関心が向けられた。1980年代から注釈的言語行動の研究を行ってきた杉戸清樹は、彼の主導の下で、国立国語研究所の報告書として『言語行動における「配慮」の諸相』（2006年 くろしお出版）を発表した。同じく1990年代から日本語の気配り表現を扱ってきた彭飛もその研究を『日本語の「配慮表現」に関する研究』（2004年 和泉書院）の名でまとめた。彭飛のこの著作は「配慮表現」研究の初期の段階のものであるが、体系的に幅広く論じられている。

「配慮表現」は、1990年代から進み始めた「前置き表現」研究や「言いさし表現」研究、副詞の意味用法研究の一部を

取り込む形で進められてきた。ポライトネス理論がもともと語用論研究の流れの中で発表されたものであるため、非定型表現をも含み、また配慮言語行動へと進むのは自然な流れであろう。しかし、表現研究としては、多門靖容「定型の前置き表現のダイナミズム」（森雄一他編『ことばのダイナミズム』2008年 くろしお出版）が示すように、定型表現をまず扱ってから進めていくのが整理しやすいであろう。

冒頭に挙げた『「配慮」はどのように示されるか』には、前置き表現の歴史的研究を扱った高山善行「日本語の配慮言語行動の歴史的研究」が収められている。「配慮表現」の歴史的研究については、科学研究費の報告書である野田尚史編『日本語の対人配慮の多様性』（2009年）にも論文が含まれており、また近いうちに野田尚史他編『日本語の配慮表現の多様性』（くろしお出版）として刊行されると聞く。

狂言の台本には依頼や断りの場面などに定型化した前置き表現が見られる。定型化したものを基本とし、その発想を把握することによって、そのヴァリエーションを押さえることができる。また、定型化の変遷（例えば骨折りなれども→大儀ながらなど）によって、和語から漢語系への表現の変化や、発想の変化などを見ることができよう。

場面における表現に先立つ前置き表現や程度副詞が、本来の表現に変わってその機能を発揮できるのも定型化によるものである。

（宮城学院女子大学）